國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

# 在日華僑の祖霊・餓鬼祭祀：東アジア・東南アジアの視点から



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 國學院大學<br>公開日: 2024-12-17<br>キーワード (Ja): 華僑, 普度, 盂蘭盆, 祖霊, 孤魂, 餓鬼, 面燃(然)大士<br>キーワード (En):<br>作成者: 松尾, 恒一, Matsuo, Koichi<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.57529/0002001296 |

# 在日華僑の祖霊・餓鬼祭祀

## ―東アジア・東南アジアの視点から

松尾恒一

現在、長崎の唐寺（とうでら）崇福寺や、黄檗宗本寺の京都萬福寺、神戸の関帝廟では、先祖祭祀のための普度会（ふどえ）が年中行事として行われている。崇福寺は「普度蘭盆勝会」、萬福寺は「普度勝会」、神戸関帝廟は「水陸普度勝会」が、それぞれの正式名称である。「蘭盆勝会」の呼称からも、これらが日本の盂蘭盆（うらぼん）行事に相当する仏事であることがわかる。

日本の盂蘭盆の催行の早い記録は、須弥山の像を飛鳥寺の西につくって盂蘭盆会を設けたとの『日本書紀』巻二十六、斎明天皇三年（六五七）七月の記事で、同斎明天皇五年（六五九）には京内諸寺で『盂蘭盆経』を講じ、七世の父母を報謝させたことが記録されている。さらに『続日本紀』には、聖武天皇の天平五年（七三三）七月六日条に「始めて大膳をして盂蘭盆の供養を備（ママ）へせしむ」と記され、盂蘭盆会の供物は、宮中の食事や儀式の膳などをつかさどる大膳職（おおかしわでのつかさ）に盂蘭盆会に奉仕させたことが記され、宮中の年中行事として行われるようになっていたことが確認できる。

漢訳仏典に基づく隋唐代の仏教儀礼が、日本の盆行事の始源である。現代の行事は、旧暦七月十三日に先祖を迎える「迎え火」を焚き、十五日に「送り火」を行い、さらに翌日、祀り手のない「無縁仏」を供養する施餓鬼を行うのが、全国広くにみ

られる盂蘭盆会である。先祖に供えた供物を精霊船に乗せて川や海に流す「精霊流し」は、施餓鬼のひとつの典型である。

「盂蘭盆」はサンスクリット語の「ウランバーナ」(ullambana、उल्लम्बन)の音写語であるとの説明を、中国・日本のいずれでもしばしば目にする。しかしながら、「ウランバーナ」は「倒懸（さかさにかける、逆さ吊りにする）」の意味で、先祖祭祀、死霊祭祀の意味はない。『盂蘭盆経』は現代まで、相当するサンスクリット語経典が見当たらない。このことより中国で作られた偽経であるとするのが通説である。

六世紀、梁の宗懍の著に隋代の杜公瞻（とこうせん）が注を付けた、中国大陸中部の年中行事を主内容とする『荊楚歳時記（けいそさいじき）』には、七月十五日の条に、僧侶および在家の者が「盆」を営んで法要を行なうことを、『盂蘭盆経』の経文を引用しつつ述べている。咸淳五年（一二六九）に南宋の志磐が編纂した『仏祖統紀』には、大同四年（五三八）に、梁の武帝自らが同泰寺で盂蘭盆斎を設けたことが伝えられている。このことは史実として認め得る、あるいは少なくとも、その頃に『盂蘭盆経』に基づく祖霊祭祀が行われていたことはまちがいないだろう。

『盂蘭盆経』には、釈尊の十大弟子で神通第一の目連尊者が、餓鬼道に堕ちて苦しむ母親について、釈尊の「安居の最後の日にすべての比丘に食べ物を施せば、母親にもその施しの一端が口に入るだろう」との教えに従ったところ、比丘ら（修行僧）は大いに喜び、目連の母親は餓鬼の境遇から脱することができた、と説かれている。マクロに見れば、斉明天皇が行った飛鳥時代の盂蘭盆は『盂蘭盆経』に基づく、『荊楚歳時記』に記されるような、中国での仏教儀礼を範とする先祖祭祀として行われ、その後、平安時代以降、貴族階層に広まった浄土、阿弥陀信仰をとりこんで民衆に拡大し、中近世期を経て、現代に伝承される日本各地の民俗行事として定着、伝承されてきたものといえる。

これに対して、長崎はじめ京都や神戸の黄檗宗寺院や廟に伝承されている盂蘭盆行事では、「面燃大士（めんねんだいし）」と呼称される餓鬼の供養が重視される点、祖霊祭祀を核とする日本の盆行事と大きく異なる。これらは、隠元禅師が伝えた明代後期の中国、特に隠元禅師の故郷福建地域の道教的な性格の強い仏事に基づくものと考えられるのである。これらは、地域の華僑が深く関わっている点でも共通しており、明清代の大陸の儀礼を継承しているとみられる。

本稿では、これら日本の華僑によって伝承される祖霊・死霊供養について、中国大陸華南地方や東南アジア地域の華僑社会

の伝承と比較しつつ、日本において華人が深く関わって伝承されてきた先祖祭儀の実態と特質を解明し、〝日本の民俗〟としての視点より考察する。

## 一、長崎唐寺の先祖祭祀と媽祖信仰—蘭盆勝会—

### 孤魂、面燃大士祭祀の盂蘭盆会

黄檗宗は、寛文元年（一六六一）開創の京都萬福寺を本山とするが、創建は長崎の唐寺が古い（崇福寺（一六二九年）、興福寺（一六二三年）、福済寺（一六二八年（寛永五）それぞれ創建）。日本における黄檗宗の開祖は福建より来日した隠元禅師で、隠元は『黄檗清規』を記し、黄檗宗の法式儀規を定めた。その七月十五日の項は、中元の盂蘭盆行事として、次のように記している。

・七月十五日解夏上堂

啓建盂蘭盆報本大會先十日前庫司知客。白方丈發普度簿。合寺僧衆及諸檀信。欲薦先霊者。各出淨資登簿。後到書記寮報先霊郷貫名字。以便入疏題牓。至期庫司營備種種菓品。供養佛菩薩・韋駄・伽藍・監齋・寒林所　掲牓文　及所薦先霊。

・寒林榜

法身本具。佛性不無。奈縁片念之差池。遂致無邊之困苦。黄泉路畔。白骨加新。熱鐵山間。飢煙競起。撞頭磕額。欲出無門。吁地號天。擬投何所。徒流離于累劫。枉出沒乎千生。凄凄草野。恒聞哭泣之聲。瑟瑟寒林。毎見風霜之慘。匪仗我佛慈力。曷超汝等幽魂。以今節屆中元。法行普度。開金繩之覺路。設願海之慈筏。各宜直下知歸。切莫依前蹉過。醍醐乳酪。隨意所需。華藏蓮臺。擧頭斯至。猶春風之微動枯木回蘇。等秋水之澂清。氷輪應現。如斯勝會。願證菩提右榜曉諭鬼趣通知

太歳某年七月　日給

（早稲田大学図書館蔵『黄檗清規』版本）

「寒林所」「寒林榜」の「寒林」とは、本文で「幽魂」「鬼」と表現されている神霊で、しばしば「孤魂」と表現される神霊の棲む林や草原のことである。祀り手のいない神霊で、日本の「無縁仏」に相当する。この『黄檗清規』の一節からもわかるように、明代（日本の室町期）の「盂蘭盆」行事は、日本のあり方と大きく異なり、「孤魂」の祭祀に重点を置いた死霊供養

が行われていたのである。

長崎、京都、神戸の黄檗宗による盂蘭盆儀礼は基本的には同様である。このうち日清貿易による、日本ともっとも長い交流の歴史を有する長崎の唐寺の儀礼が京都や神戸の範となったものと推察される。しかしながら、長崎唐寺の祭祀が他と異なるのは、清国海商が信仰した航海安全を約する媽祖信仰と密接に結びついた祭祀として「天后の祭り」として行われていた点である。仏・菩薩ではない、中国の民俗神である媽祖信仰と結びついていた点も、日本の盆行事と決定的に異なる。次項では、天后の祭りとして海商の死霊の祭祀が行われた背景や、祭儀の実態と特質について考察したい。

## 媽祖祭祀と普度会—長崎唐寺と清国海商—

現在に伝承される、長崎の唐寺で「普度蘭盆勝会」の名で行われている仏事について、その、近世期の行事の内容や目的について記しているのは『長崎名勝図絵』巻一である。本書は、文政年間（一八二〇頃）に長崎奉行のもとで、儒者で長崎聖堂助教であった饒田喩義が編纂した書で、唐三寺が天后の祭りとして「焔口供」を行っていたことを記している。

長崎の唐三寺にはそれぞれ媽祖が祀られている。これとは別に清国からの海商は商船に媽祖を祀り、長崎に着くと、「船中の神像の保護を托し、或は仏事供養を為す」ために、船内の媽祖像を船よりそれぞれが所属する唐寺へと運んで、長崎での逗留の間、安置していた。[1] この唐寺での三月・七月・九月、年三回の祭りが媽祖の誕生を祝う「媽祖誕」であったことは、『長崎實録大成』巻五「寺院開創之部」上「興福寺」の記事より知られる。この年三回、三月・七月・九月のそれぞれ二十三日の天后の祭りに、唐人屋敷より清国海商が参拝に訪れていたのである。ここで注目されるのは、『長崎名勝図絵』巻一に記されるように、その祭儀は「焔口供」であったことである。

「焔口」とは、口から焔を吐いて、手に取った食べ物が口もとに運ばれるや否や燃え尽きて食べられず、この故に何も食べられずに飢餓に苦しむ神霊のことである。その様子より「焦面」「面燃（面然）」の名で呼ばれることもあり、もろもろの餓鬼の王たる「餓鬼王」の名でも呼ばれる。『長崎名勝図絵』には、巻一の先の件に続いて、阿難尊者が痩せ襲った醜い形相の焔口餓鬼を供養したこと、焦面大士を供養する仏事「瑜珈焔口施食」を修することによる功徳が説かれている。

唐寺では、媽祖の祭祀として、長崎で客死した海商の霊を供養したのである。天后宮での媽祖信仰を濃厚に含む面燃大士（焔口餓鬼）をはじめとする孤魂供養は中国に伝承例がみられ、そ

れとの比較により唐寺での媽祖祭として行われた焔口施食の特質について以下、考察するが、その前提として、日本の施餓鬼を含む盆行事とは異なる「焔口施食」の祭儀について考えたい。

## 二、清代の中元普度会とその伝承

### 『清俗紀聞』に伝えられる清代仏教の中元普度

阿難尊者の面燃大士供養を伝えるのは、唐代の実叉難陀訳の『救面然餓鬼陀羅尼神咒経』で、日本の盆行事の起源となった目連尊者が餓鬼となった母親を救う話を伝える『盂蘭盆経』ではない。

現在、福建、広東、香港など華南地域の中元節は、寺院における僧侶による仏教儀礼の伝承も確認できるものの、道教廟（道観）での道士による面燃大士供養の行事が圧倒的に多い。日本の古代における中国仏教の受容から考えれば、『盂蘭盆経』に基づく日本に伝承される盂蘭盆会が、より古い祖霊祭祀を伝えている可能性が高い。

一方、中国においては、唐代には阿難尊者の餓鬼救済に重点を置く『瑜伽集要焔口施食儀』『瑜伽集要救阿難陀羅尼焔口軌儀経』等の書が現れる。特に前者『瑜伽集要焔口施食儀』には、祀り手のない神霊「孤魂」について、いかなる死霊が孤魂となるのか、前者では『瑜伽集要焔口施食儀』には、その巻末に「十類孤魂文」により、次の「十類」が示されている。[2]

第一　陳力委命軍陣相持、爲國亡身官員將士兵卒孤魂衆（国のために亡くなった官僚・将兵の孤魂）

第二　情識拘繫清算致命、冤家債主堕胎孤魂衆（お産で死んだり、恨みを持つ者が復讐のために堕胎させたりした孤魂）

第三　輕薄三寶、不孝父母、十悪五逆邪見孤魂衆（三宝を軽んじ、父母に不幸で、悪を尽くして死んだ孤魂）

第四　江河水溺、大海爲商、風浪飄沈採寶孤魂衆（商人などで海や川で溺死した孤魂）

第五　邊地邪見、致命蠻夷孤魂衆（異民族のところで死亡した孤魂）

第六　抛離鄉幷客死他州、無依無托游蕩孤魂衆（故郷を捨てて他郷で客死した孤魂）

第七　河井刀索、赴火投崖、牆崩屋倒、樹折嵓摧、獸咬虫傷横死孤魂衆（自殺したり、事故にあったり、獣に咬まれるなどして横死した孤魂）

第八　獄中致命、不遵王法、賊寇劫盗、抱屈銜冤、大辟分屍犯法孤魂衆（盗賊となったりして、恨みを含みながら刑死した孤魂）

第九　奴婢給使、勤勞陳力、委命貧賤孤魂衆（奴婢などになって、苦しく働き、貧困の中に命を落とした孤魂）

第十　盲聾瘖瘂足跛手、疾病纏綿、癰疽殘害、鰥寡孤獨無靠孤魂衆（身体が不自由だったり、病気に苦しみ、孤独で頼る者のない孤魂）

（『瑜伽集要焰口施食儀』「十類孤魂文」[3]）

長崎で客死した海商の死霊は、このうちの、第四「江河水溺、大海爲商、風浪飄沈採寶孤魂衆」、第五の「邊地邪見、致命蠻夷孤魂衆」の孤魂となり、その供養として焰口施食の儀礼が必要とされたものといえる。大陸から長崎での外洋を超える渡航は暴風雨ばかりでなく、オランダ商船をはじめとする海賊による攻撃等、危険極まりなく、遭難や溺死も珍しくなかった。そうして死んだ場合、祀り手のない孤魂となるのである。長崎に逗留中に病等で死去することが珍しくなかったことは、唐人・オランダ人はじめ外国人の死者が葬られる長崎の稲佐悟真寺国際墓地には、特に唐人の死者を祀る祭場のための石壇が設けられていることや、崇福寺はじめとする唐寺には近世期と推測される多数の土葬墓が見られることからもまちがいない。

年中行事としての日本人の盆行事に相当する「瑜珈焰口施食」のほかに、小型の唐船に客死した海商の死霊を迎え、長崎の町内や長崎の港湾に近い海辺で焼却する「彩舟流（さいしゅうりゅう）」と呼ばれる行事が、唐寺の僧侶により、華人が加わって行われることもあった[4]。華人による行事で、爆竹が鳴らされたものと推測される。長崎の盆行事としての木造の船を町で引き回す精霊流しや家族単位の墓地での盆行事は花火が行うなど、他地域の盂蘭盆に比して賑やかであるが、近世の彩舟流を起源とする、あるいは影響を与えたものと推測される。

近代、神戸の中華街（南京街）は、明治元年（一八六八）に神戸港が開港された年に長崎より数十名の清国人が神戸を訪れ、秋までには二四〇名が居留するようになり形成された[5]。彼らの神戸居留の三年後、一八七一年（明治四）に宇治野村（現中山手通七丁目）に兵庫県が土地六〇〇坪を共同墓地として貸与し、その二年後（一八七三）には、さらに一六二七坪の土地を購入して「中華義荘」と呼ばれる共同墓地が作られた。その後、一九二四年（大正四）に中華義荘は神戸市長田区滝谷町に移されて現在に続く。このように、華僑の神戸移住後、ほどな

くして華人のための共同墓地が開かれた。しかしながら、特に中国からの最初の渡来者である一世は、その遺体は生前の彼らの意志により、故郷に還されるものが多かった。その棺を乗せた船は「帰還船」と呼ばれ、年に二回、日本より故郷に戻った。こうしたことより、中華義荘は仮埋葬所であり、当初は棺の仮安置場所としての役割が強かったことがわかる。

帰還船により遺体が故国に戻ったのは、彼らの望郷の思いが強く、また、祖国に彼らを埋葬する家族や親族がいたからであると考えられる。華人の、生活の地を求めて異国に移民しても、死後は故郷に戻ることを意味する「落葉帰根」ということばは、宋代には見える（『剣南詩稿』）。故郷の家族、親族のもとに帰るというのは、血縁で繋がる一族のまとまりを重視する儒教的な思考であると考えられる。これに加えて、「十類孤魂文」の「第六　抛離郷幷客死他州、無依無托游蕩孤魂衆」、…異国で死去することにより孤魂となることを恐れた死生観、信仰が、遺体を帰還船により故国に返したことの大きな理由であろう。

**刑死者・身障者の死霊供養**

日本の盂蘭盆行事においては無縁仏の供養として祖霊を送る送り火をした翌日に、供物を流したりする施餓鬼が行われる伝承が多い。施餓鬼として、外に水を湛えた桶を置く「水棚」を設ける伝承もみられる（鎌倉円応寺の水施餓鬼会等）。

こうした日本の無縁仏供養と信仰を異にする餓鬼供養が、唐寺には伝承されている。『瑜伽集要焰口施食儀』に説かれる十類の孤魂については先に見たところであるが、このうちの、第八「獄中致命、不遵王法、賊寇劫盗、抱屈銜冤、大辟分屍犯法孤魂衆（盗賊となったりして、恨みを含みながら刑死した孤魂）」、第十「盲聾瘖瘂足跛手、疾病纏綿、癰疽殘害、鰥寡孤獨無葬孤魂衆（身体が不自由だったり、病気に苦しみ、孤独で頼る者のない孤魂）」に基づくと見做される供物や作法が、崇福寺等の黄檗宗寺院には伝承されているのである。

たとえば、崇福寺の普度蘭盆勝会は「米糊（ミーフー）」と呼ばれる供物が、祭壇下に置かれて供えられる。これは鉢状の器に複数の匙を添えて盛った米の粥であるが、普度蘭盆勝会に僧侶とともに奉仕する長崎の華僑はこれについて、特に斬首された処刑人は口から食べられないがゆえに、切られた首から粥を流し込むのだ、と伝えている（二〇一四～一六年、松尾の調査）。

一方、京都萬福寺の「普度勝会」においては、現在、手袋型の饅頭が供えられる。親指の曲げる向きにより、左右の手が区別されているのだと、京都華僑は語る（二〇一四～一六年、松尾の調査）。私は実見したことはないが、かつては足形の饅頭

も供えられたという。これらは、先天的・後天的、いずれにしても手や足を失った身障者の供養のための供物であるという。

崇福寺・萬福寺での普度会は三日間の祭儀は、最終日の夜、金山・銀山等の供物を焼却して、迎えた祖霊を冥界へと送り戻す。崇福寺では結願の翌日一日おいた二日後、萬福寺では、翌日に「補施（ブォシー）」と呼ばれる供養が行われる。「補施」について、いずれの寺院においても、華僑らは、手や足のない身障者の霊は祖霊とともにただちには帰れないがゆえに、翌日、あるいは一日置いた翌々日に、彼らを送るのだと認識している。特に、萬福寺の場合には補施は、寺内に祀られている俊足の韋駄天が、手足のない孤魂を引き連れて冥界へと戻る作法であると華僑は伝えている。

日本における無縁仏の考え方とは大きく異なる、孤魂についての認識は『瑜伽集要焰口施食儀』に説かれるように少なくとも明代には成立しているが、ここに説かれる「十類孤魂文」に記される孤魂の認識に基づく儀礼は、明代末に隠元が伝えた仏教に拠る作法であるといえよう。

崇福寺の蘭盆勝会においては、「白黒無常」とも呼称される冥界の使者である七爺（ちーや）・八爺（ぺーや）といった道教神も祀られ、明代の道教の要素を多分に含んでいる点も看過できない。

日本の盂蘭盆会と、死霊・祖霊祭祀といった点では共通しているものの、黄檗宗寺院に伝えられた普度儀礼は、明代に行われていた中国の民間信仰である道教の要素を多分に含む仏教儀礼が伝えられたと認めることができよう。

長崎の唐寺や京都萬福寺の蘭盆会（瑜珈焰口施食）について、長崎奉行のもとで清代の習俗を図解とともに記して成立した『清俗紀聞』には[6]、上壇に釈迦・観音・阿弥陀・地蔵をはじめとする七仏の牌を、下段に飢えに苦しむ餓鬼の王「面然大士」等の牌を立てると記されている。また、僧侶の就く「大扶座」には観音が安置され、この観音と向かい合わせるようにして正面に「水陸一切男女孤魂等位」を祀る壇が備えられていることが図解により知られる。『長崎名勝図絵』の唐寺において天后祭として行われた「焔口供」においては、焦面大士や「水陸一切男女孤魂」の位牌が供養されることが述べられている。現在の崇福寺の蘭盆勝会では、釈尊を祀る大雄宝殿の前庭に、向い合せに立てられた祭壇に「南無面然大士〔法界六道十類孤魂、依草附木魑魅魍魎〕」の木の位牌が置かれる。また、京都萬福寺の普度勝会においては、やはり大雄宝殿前庭に、向い合せに祭壇が置かれ、「三界万霊」の位牌の前に「焦面大士」の位牌が重ね合わせて立てられる。

特に崇福寺の面然大士の位牌には先に見た『瑜伽集要焰口施食儀』に説かれる「十類孤魂」が明記されているのは看過できない。斬首された処刑人のための供物や、萬福寺であるが、手足を失った身障者の死霊のための手型の饅頭の供物については先述したところであるが、これら黄檗宗の普度会は、隠元禅師により伝えられた明代の普度儀礼の伝承と認められるのである。

## 三、華南地域の中元普度会—香港の伝承を中心に—

### 天后宮における中元普度会—香港坪洲島—

中国においては、日本の黄檗宗寺院に伝えられた餓鬼王「面然大士」の供養を重視する点で大きな共通性を有する中元普度が伝承されている。しかしながら、中国では、先述したように寺院における僧侶による中元普度会よりは、道士による道教儀礼としての中元普度会のほうがポピュラーであるのが、日本と大きく異なる。

私は二〇一六年～二〇一八年、華南地域、広州・香港で、いくつかの中元普度・盂蘭盆行事を調査する機会を得た（広州では六榕寺の盂蘭盆孝親報恩法会・光孝寺の四聖六凡普度勝会（水陸普渡大斎勝会）・都城隍廟の中元法会、香港では銅鑼湾ビクトリア公園の香港潮属社團総会主催の盂蘭文化節・筲箕湾の潮州南安堂福利協進会盂蘭勝会・油蔴地旺角区四方街街坊の盂蘭勝會・坪洲島天后宮での中元建醮など）[7]。

これらの中で、香港坪洲島の「中元建醮」は[8]、天后宮と並び建つ、かつて島の行政を掌った坪洲郷事委員会（「郷事委員会」は、イギリス統治時代に定められた行政単位、現在は「坪洲政府合署」がここより徒歩五分ほどの地に建つ）の前庭に、高さ約五メートルのねぶたを思わせる面燃大士の紙の張り子像が立てられて、旧暦七月十三日～十五日、三日間にわたる道士による道教儀礼が修される。

郷事委員会・天后宮前には三つの幄舎が立てられる。一つは、島の各家庭の先祖の位牌が置かれる「附薦台」、二つ目が三官大帝（天官・地官・水官）・五穀王・城隍神等を祀る「神棚」、三つ目が面然大士のほか三太子爺・洪聖老爺・天后聖母を勧請する「経師棚」である。面然大士の巨像とこの三つの幄舎のなかの祭壇のほか、天后宮内で道士が普度の儀礼を行う。天后宮には、入り口の両脇に「聖德著乾坤當茲節屈中元會設盂蘭超渡幽魂登樂國」と書かれた対聯が貼られることより、天后宮も幽魂を救済する中元普度を行う重要な宗教空間であると認識されていることがわかる。

## 海賊と海上漁民〝蛋民〟の媽祖信仰と祖霊祭祀

坪洲島は、かつて—少なくとも民国時代までは「蛋民（たんみん）」と呼ばれる漁民が生活する島でもあった。蛋民は陸に住んで船で海に出漁する漁民ではなく、港に接岸して停泊する船で生まれ育ち、漁のとき以外には船で生活する水上漁民である。かつて大陸沿岸に数多くいたが、中国政府の政策により陸で生活するようになり、現代ではその多くが姿を消した。坪洲島では現代では、島より香港市内に船で通勤する三次産業の従事者が少なくないものの、港湾には漁船が多く停泊しており、漁業も島の重要な生業として続いている。

坪洲天后宮での中元建醮では二日目は、道士の一行は早朝より午前、島の小祠を巡り、その前で線香を上げ、祈る。このとき海岸では幽魂供養のために線香を立て、漁業従事者とともに祈りを捧げる。十類孤魂の第四には「江河水溺、大海爲商、風浪飄沈採寶孤魂衆」、第七には「河井刀索、赴火投崖、牆崩屋倒、樹折嵓摧、獸咬虫傷横死孤魂衆」と記されるように、海河で事故死した場合に孤魂となると説明されている。漁業において海上での遭難により亡くなった幽魂の供養は、坪洲島の中元建醮において必須であろう。

漁民や海商にとって、海上での航海安全を約する媽祖への信仰や祭祀は欠かせなかった。さらに、坪洲島の蛋民は単なる漁民ではなく、清代には南シナ海で清朝水軍やイギリスと戦った大海賊、紅旗幇の軍船を率いた張保仔の水夫として従事した[9]。海賊船にも媽祖が祀られたが、彼らにとっての媽祖は単に海上での安全を約する女神ではなく、戦勝祈願をする神霊であった。そうした、かつて海賊の水夫となった漁民には海上での戦いにより命を失った者もいたはずであるが、海岸での祈りは、そうして孤魂となった死霊の供養も含まれていよう。

張保仔は坪洲島の天后への信仰に篤く、坪洲島民には、現在でも英雄として親しまれている。坪洲天后宮内には、交易や冊封使船として使用された「鳥船[10]」と呼ばれたジャンク船の模型が安置されている。こうした例は、坪洲以外の天后宮にも見ることができる。マカオの天后宮内にもジャンク船の模型が飾られるが、その甲板には大砲を構えた船員とともに媽祖が佇立している。一六世紀以来、実質的にポルトガルに統治されていたマカオは、島の周囲に海上に砲口を向けた大砲が置かれた要塞であり、常に戦闘態勢をとっていたのである。

このほかに、媽祖となった林默娘（リンモウニャン）の誕生した福建の文峰天后宮においては、上元・中元・下元のそれぞれで年三回の普度が行われる。また、ハワイホノルルの華僑の住む中華街には、有

力者林氏の祠堂と天后宮が一体化した「林西河堂」が建ち、一階が中国雑貨店、二階が媽祖・観音を祀る天后宮、三階が林氏の祠堂となっているが、天后宮では旧暦七月十五日に「焼衣中元節」が行われる（松尾、二〇二〇年のホノルル調査）。焼衣とは、冥界の祖霊や孤魂に、衣を焼いて天上に送って捧げることを意味し、他所の華人の焔口供にも見られる作法である。先に見た神戸の華僑と同様に、特に故国よりハワイに渡った一世の華人は当島で死去した後、孤魂となることを懼れたのであろう。

長崎の唐寺において天后祭として孤魂に重点を置いた死霊祭祀として行われた焔口供は、これら中国に伝承される民俗の類例として位置づけられよう。海上という環境と漁業や貿易等の生業、そうした活動において避けられなかった死者供養の祭祀として、媽祖信仰と死霊祭祀はおのずと結びつき、天后宮における焔口供が行われるようになっていったものといえる。

## 四、マレーシア華僑の中元普度会―華人の地域連合と福祉・教育支援事業―

**二次大戦後、ペナンの地域華僑社会を統合する中元普度連合会**

中元普度の盂蘭盆行事が、華人への社会福祉や教育への支援を重要な目的として行われているのが、マレーシアにおいて首都クアラルンプールとともに歴史・文化の中心となったペナンの中元普度、盂蘭盆会である。

マレー半島は、一八〇〇年代にイギリスの植民地として、その統治下に入った。マラッカ海峡に面したペナンはイギリス東インド会社の重要な商活動の拠点となり、首都クアラルンプールとともに歴史・文化の中心となった。そのペナンの中心街が、イギリス国王ジョージ四世の名にちなむジョージタウンである。ヨーロッパで最初にマレー半島に入ったのは、アフリカ南端の喜望峰回りでインド洋を越え、マラッカ海峡を通過して中国大陸に到達したポルトガルであった。その後、オランダが進出した後、イギリスの統治下に入った。第二次世界大戦において一九四一年、日本軍が英領マラヤに侵攻するが、日本は敗戦し、一九五七年にマレーシアはイギリスから独立して現在に至

る。ヨーロッパのマレー半島進出時には、マレー原住民のほか華人やインド人の移民が半島に居住していた。タイやビルマからの移民もあり、マレーシア政府は現在、多民族・多文化共生を重視しているが、中華人民共和国の特に改革開放以降の経済面での伸長と、人口比二〇％超というウェイトの大きさにより、華僑[11]の経済、政治面での影響力が強い。

私がペナンの調査を開始したのは二〇一〇年代であるが、昨年二〇二三年に華人地域の中元普度を参観する機会を得た。その三日間の儀礼の調査は、現地の華人であり、歴史学・文化人類学の研究者である閩南師範大学の王琛發教授の導きにより実現した。

三日間の普度を実見したのは、歴史的景観を残すジョージタウンの華人地域の一つ、関丹律（Kuantan Road Pasar）万区での蘭盆会である。ふだんは漁市場の「関丹律菜市場」が会場となり、高さ四メートルほどの紙を主材とする人形の面燃大士を主神として、地域の華人を主とする大勢の参拝者が訪れるなかで、道士による道教祭祀が行われる。頭上に女神の観音を頂く面燃大士前に、焼いた豚や鶏、大量の饅頭をはじめとする菓子、果実、茶が供えられるのも香港や日本の華僑の普度会と同様である。道士による道教祭祀も、先に見た香港に伝承される儀礼とほとんど同様である。面然大士は、最終日の深夜に会場前の道に運ばれ、並べられた紙銭の上に乗せられて焼却され、天上に送られて、三日間の行事が終結する。

**ペナンの華人と中元普度連合会**

ペナンの中元普度の現代への伝承において注目されるのは、[12]年中行事として、地域単位で行われるに留まらず、中元普度を行う街区が組織的に連合してペナンの華人の懇親を深め、さらに福祉活動や学校教育に貢献する活動を行っていることである。

この組織は「檳州（ペナン）中元連合会」と称し、[13]一九七三年に結成された。二〇二三年現在、中元普度を行う町を単位とする一三〇を越える「街区組」のほか、道教廟や祠堂単位の七〇超の「神壇組」、有志の信仰組織や会社等三〇超の「社団組」、一〇余の商店や電器店からなる「商家組」が加入している。

各街区では中元普度の実行主体となる「理事会」が組織される。数は少ないが、ペナン全体の連合会の結成以前、一九五〇～六〇年代に、すでに理事会を組織している街区も存する（「檳州双溪里蒙中元理事会」は一九五五年、「檳州日本街暨日本新路」は一九六九年結成、等）。

一九八一年頃に、主に本会の華人に向けて発刊された私家版の『檳州中元連合会紀念会訊』には、連合会主席の楊景獅局紳

が発刊の辞を寄せており、連合会は中元普度の開催にとどまらず、「社会福利、慈善教育」に成果をあげており、そのことについてペナンの各「街区中元同人」への謝辞を述べている。

そうした、中元連合会の華人への福祉や学校教育の支援活動には多額の金員を要するが、各中元普度の街区からの寄付のほか、四～五月の定例行事としての慰労会、プロの歌手を招いてのチャリティーコンサートや、会員を主とする歌唱大会等のイベントは集金のための重要な活動である。

各街区の中元普度・蘭盆会は、旧暦七月十五日を中心にその前後約一か月の間に行われる。この期間に開催される連合会の祝宴も、連合会の社会活動の基金獲得のための重要な機会である。各街区の理事会より、正副の主席役三名ほか五～一〇名前後の理事会員が出席し、一七〇超の街区より出席するので、一〇〇〇名を超える人数の収容可能な大会場での大祝宴となる。ステージでは、連合会理事のあいさつや祝辞、プロの歌手による歌唱が披露されたりするが、本祝宴の眼目は高級ウィスキーなどの高価な洋酒の競り売りである。祝宴会場のあちこちで手が上がり、高額で競り落とされると会場では喝采が上がる。そうした収益は、連合会の基金に投入されて社会活動の重要な資金として組み込まれる。競り落とした華人にとっては中元普度連合会を通じた華人社会への貢献の証としとなる栄誉であり、少なくともペナンの華人にとってのステイタスとなるのである。

## 面燃大士が祀られる檳州中元連合会会所

連合会では、一九七三年の結成以来二〇二二年まで、毎年、中華学校のほか病院等一機関、多い年には二～三機関に寄付を行っている。ただし二〇二〇、二〇二一年の二年間は、新型コロナ禍による活動停止により募金の活動はなされなかった。世界中、数多く、さまざまな社会活動が制限されたが、中元連合会もその例外ではなかったのである。一九八四年には盲人院に約四三四〇〇〇リンギッド（約一三〇〇万日本円）の寄付がなされており（以上、二〇二三年五月に行われた「檳州中元連合会暨檳州各街区慶賛中元及神壇、籌募北海中華二校拡建校舎基金、慰労宴会」での配布の冊子に基づく）、身障者への支援にも積極的であることが窺われる。

連合会設立の一〇年後、一九八三年には、中元普度連合会の活動の拠点として、四階建ての鉄筋コンクリート造りの「檳州（ペナン）中元連合会会所」がジョージタウンに隣接するジェルトン（Jelutong）街に設立された。役員（理事会員）の打ち合わせ等の会合だけでなく、華人への貢献のための教育、福祉活動の

会場としても使われている。たとえば、二〇一五年には「施医贈薬」として、医師を招いて特に高齢者に呼びかけて診療を行ったり、足温浴を提供したりするなど、健康増進活動を行っている。

中元連合会という、信仰に基づく儀礼を実施する地域で結ばれた組織であることを示すのは、一階は「恵玉堂」と名づけられて、「観音（ママ）大仕爺」の位牌を祀る祭壇が安置されていることである。観音菩薩（道教では観音大士）は、餓鬼王たる面然大士を救済する女神であるが、面然大士は観音の化身として信仰されるようになる。こうした民俗的な変容を遂げた（単なる観音ではない）面然大士への信仰がペナンの華人の紐帯となって、中元連合会が成り立っていることが明確に知られるのである。

マレーシア華人は、当地の錫鉱山やプランテーションの労働者〝苦力（クーリー）〟として移民した者が多かったが、[14] 故国からマレーシアへの渡航の橋渡しとなったブローカーも華人であった。ペナンにおけるブローカーのなかでも福建省海澄県出身の邱氏はもっとも有力で、[15] 邱氏一族は財を成し、一八五一年、祠堂として壮麗な中華建築である龍山堂を創建した。龍山堂には、代々の一族の位牌が祀られる祖堂「詒穀堂」とともに、王孫爺と大使爺を主神として、福徳正神・観音・媽祖神・保生大帝等を祀る道教廟でもある。すなわち、龍山堂は邱氏を護る祭神を祀る廟であるとともに祠堂でもあるのである。

錫鉱山やプランテーションでの苦力として働いた華人は、経済力をつけるとともに飲食や小売業へと転じジョージタウン等の都市民となっていった。移民である彼らは、基本的に居住区域内での同姓同族の人数は限られており、龍山堂を創建した邱氏や、「世徳堂謝公司」を建立した謝氏は特別な存在であった。先祖・孤魂供養として中元普度会は、祠堂を建るまでには至らなかった地域単位の華僑であったが、一九五〇年以降、地縁で結ばれた華人集団として「街区」を単位とする中元普度会のための、毎年の理事会が組織されていった。その二〇〇を超える街区や廟が連合して、「檳州中元連合会」の結成に至ったのである。

中国の宗族は、一族の相互扶助や先祖祭祀にとどまらず、教育や社会福祉にも力を注ぎ、教師や弁護士等になる華人をも輩出した。現在、東南アジアや日本の華人社会には中華学校が一つ以上設立されているが、卒業後は大学へと進学して、（親の商工業を継がず）教師や弁護士、医師等の職に就く華人も少なくない。こうした状況、傾向は中華街を形成した長崎・神戸・横浜の華僑と同様である。檳州中元連合会の理事には、地元議

員や弁護士も名を連ねており、多民族国家のマレーシアにあって、政治力を高めることも重視しているのである。

ペナンに限らず、華僑は、前近代より移民した地域・国での政治・行政、経済等、社会での影響力・発言力を高めるために教育の必要性を認識していた。ペナンの中元普度会の期間には、華人居住区域の諸所に「檳州中元連合会暨檳威各街区　慶讃中元及神壇　籌募檳州中元連合会　教育発展基金」の横断幕が掛けられている。中元連合会の普度会の大きな目的が、祖霊・孤魂祭祀による各地域の華人の結束を強めるにとどまらず、教育振興による未来に向けての発展のための募金にあったことが知られる。

孤魂や先祖供養といった信仰行事が、現在、未来に向けての社会活動として、二次大戦後に、華人が都市民へと転換する状況に応じた質的な変容を遂げて継承されているのである。

＊　＊　＊　＊

## 多文化時代の日本民俗学の可能性

本稿は、日本における華僑の先祖祭祀の年中行事の考察として、長崎における伝承を主たる対象として、その起源となった中国における伝承と、他国の華僑の先祖祭祀として、マレーシアペナンにおける伝承と比較しつつ、その特質を検討した。

日本の盂蘭盆行事も、長崎、神戸、京都に伝承される普度勝会や蘭盆行事も、仏教の盂蘭盆思想を淵源としている点、共通している。しかしながら、華僑の普度や蘭盆行事は、近世初頭に黄檗宗とともに隠元禅師が伝えた当時（明代後期）の道教的な要素の強い普度会であり、それが長崎や京都の華僑に現代まで伝承され、日本の無縁仏に相当する「焔口餓鬼」「面燃大士」と呼ばれる餓鬼供養に重点が置かれている点で、日本の盆行事とは決定的に異なる様相を明らかにした。

そうした、日本華僑と黄檗宗寺院が伝える面燃大士の祭祀に重点が置かれる中元普度会は、その起源となった中国にも伝承されており、日本の黄檗宗寺院と華僑により伝承する普度の特質を明らかにするための比較を行った。中国においては、寺院における中元普度も見られるものの、大勢としては道教廟における道士による祭祀が優勢である。その具体的な例として、特に香港に伝承されるいくつかの中元普度会について考察した。特に坪洲島の中元建醮は、かつて漁業を主たる生業とした蛋民の島において、航海安全を約する媽祖を祀る天后宮において行われる点が特徴である。そうした点に近世に清国海商の航海安全を祈願した天后祭祀でもあった長崎の焔口施食としての普度会との共通性が見出される。

さらに、日本の華僑の伝承する普度蘭盆会の特質の考察として、ハワイのホノルルの中華街の天后宮や、東南アジアのタイやマレーシアの華人街に中元普度が伝承されていることを指摘し、特にマレーシアペナンの伝承について検討した。ペナンの中元普度は、中心街ジョージタウンを中心に一五〇を超える各街が、旧暦七月十五日の前後約一か月にわたって行われる。特筆されるのは、街区のほか、道教廟や華人の営利会社・商店なども加わり、二〇二三年現在、二〇〇超の団体が加入する「檳州中元連合会」が一九七〇年の初頭に組織されたことである。この連合会は中元普度を契機とした単なる華人の親睦・交流団体ではなく、ペナンの華人学校への支援や、華人への医療の提供などを行う福利・慈善活動を行う社会団体でもあった。そのために多額の基金が必要となるが、中元普度に供えられた金員や寄付金のほか、チャリティーコンサートなどのイベントを行うなど資金獲得のための活動を年間を通じて実施している。ペナンの華僑は福建・広東出身者が二大勢力であったが、彼らを東南アジアへと送り出すブローカーも華人であった。邱氏や謝氏はその代表で、龍山堂・世德堂謝公司といった先祖祭祀を行う祠堂と道教神を祀る廟を兼ね備えた壮麗な中華建築を創建した。その堂舎内、あるいは近隣には一族はじめ、華人の教育のための中華学校を設立した。先祖・道教神祭祀を行う施設が、宗族はじめ華人への教育や慈善活動を行う拠点ともなっていたのである。

檳州中元連合会は、一九七三年結成の一〇年後に会館を設立するが、その一階には「観音　大仕爺（ママ）」を祀る祭壇を備えており、彼らの紐帯として中元普度における祭神が大切にされている。香港の中元普度においては、筲箕湾での中元普度のように、天災・人災により民衆が困窮した際に、救済活動が行われた例も見られる。[16] ペナンの中元普度連合会は、そうした救済活動の延長上にも位置づけられるが、運営の中核となる理事会には地元議員や弁護士が名を連ねており、行政・政治への、華人の影響力を強めようとする志向が顕著である。

日本民俗学は、柳田国男・折口信夫による創始期以来、日本列島の日本語を話す日本人の文化を主題として、日本（人）の〝基層〟を成すとの想定のもとに列島諸地域の精神や文化の伝承事象を追及してきた。本稿で主題とした、外来宗教である仏教を起源とする文化にしても、日本人にとって仏教は皮相に過ぎず、その基層に仏教伝来以前の祖霊信仰・先祖祭祀があることを強調した見解は、その大きな成果と認められている。

しかしながら、その後、東アジアの伝承を視野に入れた鈴木

光男により、盆行事は、むしろ無縁仏に相当する孤魂祭祀に重点があったとみるべきとの見解が、柳田国男の祖霊論の批判として提起され[17]、この鈴木論は池上良正により継承されている[18]。私は、自身の日本、及び華南、東南アジアの調査における実感からも、鈴木や池上の見解に全面的に賛同するが、このことについては、すでに別稿で指摘したところなので[19]、繰り返さない。

時代を越えて継承される「伝承」文化と、民俗が諸地域へと波及する「伝播」の解明のために、民俗を考究するうえで、柳田・折口以来、民俗学の調査、研究のためのフィールドワークの重要性は変わらない。こうした観点や研究方法は、日本文化の〝祖型〟と想定された日本人の精神文化を抽出し得るといった仮説に基づいてきた。この仮説が妥当であるとすると、これによって抽出された日本文化以外の地域文化は、地域における特異な事象として軽視されることになる。しかしながら、現代の民俗学において、民俗文化の地域性を追及しない研究者は皆無であろう。

たとえば、伝統とされる正月の行事食「お節料理」のなかに「栗きんとん」がある。栗は稲作の伝来以前、縄文時代以来の歴史を有するが、餡の部分のさつま芋や砂糖は中国大陸や沖縄から輸出され、近世期に列島全域に広まっていった。しかもさつま芋は、南米原産で、ヨーロッパの大航海によって中国大陸に渡り、琉球を経て日本へと伝来した。栗は縄文時代以来一万年を超える歴史を有するが、砂糖や南米原産のさつま芋が庶民レベルに広がるのは近世以降である。このような歴史的な重層性があり、ヨーロッパやアメリカ大陸までを含めた世界とのつながりなくして、正月の伝統の行事食の成り立ち、歴史は考えられない。こうした一例からも、何をもって日本文化の〝基層〟と考えるかは非常に難しく、文化の有形・無形を問わず個々の歴史を先入観なく解明してゆくことが民俗学においても不可欠であろう。

現在の華僑は、その前身となった長崎に逗留した清国海商による日清貿易の時代を含めれば四世紀を超える歳月が経ち、長崎で客死した華人の供養のための普度会は、華僑が深く関わり続けて現在まで伝承されてきた。この普度会は、明清代の道教要素を濃厚に持つ普度行事であった。

日本華僑やその寺院に伝えられる普度会は、伝来元の中国においても伝承され、日清貿易とほぼ同じ時代に、東南アジアや近代にハワイに渡った華僑にも伝えられた。

〝伝承〟と〝伝播〟の解明を目指すフィールドワークを基本とする調査研究は、民俗研究の重要な方法であるが、基本的に

は日本国内における調査研究にとどまってきた。それは日本の〝民俗〟は日本列島内で生成される文化であると、意識的、もしくは無意識のうちに前提とされてきたからであろう。しかしながら、仏教に代表される信仰文化も、行事食など伝統的な日本の食など生存に欠かせない農作物も古代、中世以来の外国起源のものが多数有する。

移民研究は歴史学の厚い研究を有し、また、その現況については文化人類学からのフィールドワークに基づく研究が少なくない。さらには、日本国内の地域内の諸外国人の就業や共同体などに注目して、多文化共生のあり方を追求した行政のレポートや社会学からの論文も数多い。こうした分野の成果にも学びつつ、民俗学は、外国人が故国から来日して日本での生活を選んだ経緯や、移住にあたっての故国と日本との言語や法的制度の壁、日本での生活について細かな聞き取りを重ねることが必要であろう。

現在、日本の少子化による人口減の対策として、日本政府は移民政策の検討を加速しており、どのような多文化共生が可能か真剣に検討すべき時代に突入している。

日本民俗学は、民衆の生活の実態や年中行事・人生儀礼等、生活レベルでの文化や生業研究に大きな成果を挙げてきたが、日本列島内の事象にとどまってきたのは、二次大戦前・戦中の国威発揚の国家の動向と無関係ではない。戦後の日本民俗学を発展させたのは、柳田・折口の弟子の世代である。彼らは県・市町村単位の行政の自治体史での「民俗編」のための調査を主導し、日本各地の民俗の実態が克明に記録された。それらは、戦前・戦中期の民俗学のあり方にほとんど無批判でありつつ、農山村部を含めて都市化する高度経済成長期の生活にも目を向けて、一九八〇年代には都市民の平生に焦点を当てた〝都市民俗学〟が提唱された。しかしながら、生活に革命をもたらした自動車や電化製品の組み立てといった労働や従事者、工場などの現場、あるいは日本からの〝ふつうの人〟によって作られた輸出品がもたらしたであろう諸外国への影響にはほとんど関心を寄せなかった。

日本に移入された外国文化や、日本列島に移住する外国人、また、近代に移民として南米・北米等世界に移り住んだ日本人を視野に入れ、〝伝承〟と〝伝播〟について日本と深い関係を有する外国をも対象として調査、研究を進めることにより、民俗学が、未来に向けた社会提言の土台ともなる成果を生み出す重要な人文科学となることが期待される。

**注**

（1）松尾「清代前期、媽祖信仰・祭祀の日本伝播、歴史と伝承―ヨーロッパの東アジア進出に注目して―」（荒見泰史編『仏教の東漸と西漸』アジア遊学二五一、勉誠社、二〇二〇年九月）参照。

（2）松本浩一「中元節の成立について―普渡文献の変遷を中心に―」（『現代中国学方法論とその文化的視角［方法論・文化篇］』、愛知大学国際中国学研究センター、二〇〇六年十一月）参照。以下の十類の日本語訳は、本松本論文に拠る。

（3）『瑜伽集要焰口施食儀』は、明代、永楽八年（一四一〇）、成祖の勅令により編纂が開始され、英宗の正統五年（一四四〇）に完成した『永楽北蔵』所収本による。

（4）松尾編『日本藏明清時期中日貿易相関民俗資料選編』（陝西師範大学出版、二〇一三年）所収の、国立歴史民俗博物館蔵『彩舟流唐船図』、早稲田大学図書館蔵『長崎港南京貿易絵図』（川原慶賀画）と、松尾による解説参照。

（5）以下、神戸華僑の共同墓地「中華義荘」や、華僑の遺体を日本より中国へと送る帰還船については、松尾「日本華僑の共同墓地と后土・土地神の考察：日本国内の華僑霊園の地域差に注目して」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一九九、二〇一七年三月）参照。

（6）以下、『清俗紀聞』に記される焔口供についての分析や、在日華僑の伝える蘭盆普度会については、松尾「在日華僑の先祖祭祀、普度勝会の伝承と現在」（名古屋大学文学研究科人類文化遺産テクスト学研究センター編『HERITEX』Vol.1、二〇一五年十二月）。

（7）香港では林錦源香港市博物館副館長の、広州では中山大学王玉氷博士（現在山東理工大学法学院講師）の協力を得た。香港の銅鑼湾ビクトリア公園の香港潮属社團総会主催の盂蘭文化節、筲箕湾の潮州南安堂福利協進会盂蘭勝会、油蔴地旺角区四方街街坊の盂蘭勝會の祭祀については、ともに調査を行った荒見泰史の「香港盂蘭勝会の現状と餓鬼供養」（『アジア社会文化研究』第十八号、二〇一七年三月）参照。

（8）以下、香港坪洲島の中元建醮の詳細は、松尾「清代、南シナ海の海商・海賊、漁民と媽祖信仰、歴史と伝承」（『儀礼文化学会紀要』五号（通巻四七号）、二〇一七年三月）参照。

（9）前掲注五松尾「清代、南シナ海の海商・海賊、漁民と媽祖信仰、歴史と伝承」参照。

（10）「鳥船」と呼ばれた明清海商や冊封使の使用した唐船は、海上での戦闘に備えて大砲を装備する艦船でもあった。松尾「（鳥船）、顔のある船―明清代の唐船と琉球船―」（国立歴史民俗博物館編『Rekihaku』、文学通信、二〇二四年二月）参照。

（11）ペナンの華人の歴史については、アメリカ、サンフランシスコの華人を中心とする研究であるが、内田直作「三藩市（サンフランシスコ）唐人街の社会構造（二）：―広肇の一典型―」（『成城大學經濟研究』二十一、一九六五年三月）がもっとも早い。近年の研究では、篠崎香織「中華民国の成立とペナンの華人―越境を生きるための複数の場における政治参加」（地域研究コンソーシアム『地域研究』十四（二）、二〇一四年三月）が、民国時代のペナンの華人の故国や、ペナンの地方政府との関わりを追及した大きな成果である。

（12）マレーシアの華人の伝承する中元普度会とその社会的意義については、櫻田涼子がジョホール州のフィールドワークに基づいて「マレーシア華人社会における儀礼の変容―中元節の事例から―」（『筑波大学地域研究』二十八、二〇〇七年）を発表しており、ペナンの中元節についても先行研究に基づいて言及されている。なお、ペナンの華人らの中元節が、街区・同業組織・同郷会等の単位で開催され、複数の中元節に参加する華人がいることや、住人による中元節ための金員の積立、また、最終日の送神霊後の祝宴での競売等に注目しつつも、本稿

で論じる中元連合会についての言及はない。

(13) 以下、檳州中元連合の沿革や活動については、松尾の二〇一三年九月の調査の折に檳州中元連合会より提供を受けた、会の華人への配布を目的としてパソコンにより入力し、私製本したA4版の冊子本『檳州中元連合会紀念特刊』（奥付はなく、内容より一九八一年頃の作成と推測される）、『檳州中元連合会紀念会訊』（A3二つ折り、A4版四ページのパンフレット、二〇一五年八月（創刊号）、二〇一六年四月、二〇一八年八月）等の会報ほか、中元連合会主催のチャリティーコンサートのパンフレット等に基づく。

(14) マレーシア・ペラ地域での一八七〇～九〇年代の華人の錫鉱山労働については、東條哲郎「近代マレー半島ペラにおける華人錫採掘」（二〇一二年度、東京大学人文社会系研究科博士論文）参照。

(15) 前掲註(11)内田「三藩市唐人街の社会構造（二）」参照。

(16) 香港筲箕湾の中元普度における貧困救済の歴史等、社会的な役割については、別稿を予定している。

(17) 鈴木光男「盆に来る霊—台湾の中元節を手がかりとした比較民俗学的試論—」（『マレビトの構造』昭和四九年（一九七四）十一月、（竹田聴洲編『葬送墓制研究』第三巻「先祖供養」（昭和五十四年、名著出版、再録）。

(18) 池上良正「宗教学の研究課題としての「施餓鬼」」（駒澤大学総合教育研究部文化学部門『駒沢大学文化』三十二、二〇一四年三月）。

(19) 松尾「在日華僑の普度勝会、長崎・神戸・京都」（『西日本宗教研究誌』第四号（文化資源としての神仏習合～フォークロア・パラドクスを超えて～：西日本宗教学会第四回学術大会公開シンポジウム記録）。